

## 本物の家を求めて 『歓楽の家』におけるリリー・バートの渴望

---

今 井 道 子

---

### 1 はじめに

Edith Wharton は、1897 年に室内装飾の本 *The Decoration of Houses* を出版し、1902 年にはマサチューセッツ州レノックスに自らデザインしたカントリーハウス The Mount を建てた。彼女は自伝 *A Backward Glance* において、40 歳になって得たこの家を「私の初めての本物の家 (my first real home) であった」と回想している (125)。そこには彼女がその創造性を発揮し作り上げた作品ともいえる家に対する満足感が表れていると同時に、裕福な一族に生まれ育ち優雅に暮らす彼女がそれまで「本物」と感じる「家」を持ち得ていなかったことが示されていると言えよう。ウォートンはまた、作家という「天職」(vocation) を見出すまでの自分を「家を持たない放浪者 (homeless waif) のようであった」と述べている (119)。彼女にとって「天職」を得ることは「家」を得ることである。彼女は、自身の存在基盤を「家」(home) として認識しているといえよう。

ウォートンは、ザ・マウントと作家の道という二つの「家」を獲得した時期に代表作 *The House of Mirth* を執筆しているが、その後の人生においても、彼女の「家」の探求は続くのである。ウォートンは 1912 年には「最初の本物の家」であったザ・マウントを売り、翌年離婚し、その後はヨーロッパに拠点を移し、

各地に家を持ち転々とする生活を送ることとなる。1922年にフランスの南東部イエール郊外のセント・クレア城を手に入れたとき、彼女はその喜びを「やっと自分にふさわしい男性と結婚したような気分」であると友人に書き送っている (Lewis 3)。彼女は人生を「家」の獲得の道程として捉えているように思われる。

このように「家」に格別の思い入れをもつウォートンは、『歓楽の家』において「家」というモチーフを駆使している。世紀末のニューヨーク社交界における旧勢力 old New York<sup>1</sup>と財力によって勢力を伸ばしてきた新興勢力 new New York の闘ぎ合いというプロットにおいて、力の誇示の象徴として家を用い、主人公 Lily Bart の住まう家に彼女の境遇を映しだしている。そして「家」はリリーが生涯その獲得を目指すものである。また、“A Moment's Ornament,” “The Year of the Rose” という二つの草稿段階におけるタイトルに代わる *The House of Mirth* という最終タイトルからは、ウォートンがこの作品に込めた「家」という視座を読みとり得るであろう。

この作品において、ウォートンはリリーから様々な形で「家」を奪うが、リリーはウォートンと同じように「家」に強い感受性を持ち、それを追い求めるのである。その姿には、ウォートン自身が色濃く投影されているといえるであろう。本稿においては、リリーの人生を「家」の希求という観点から検証し、そこに作者の「家」に対する憧憬、批判、新たな視点がどのように示されているかを考察する。

## 2 似非なる家の拒絶

リリーは「活力に溢れ決然とした」支配的な母親と「執事と、時計のねじを巻きにきた職人との中間の場を占める」存在であると描写される影の薄い父親の間で育てられる (29)。<sup>2</sup> その家の在り方は、彼女によって「絶え間なくより多くの金を必要としながら、歓楽の急流をジグザグのたどたどしいコースで滑っていく家族船」と例えられ (30)、安定や落ち着きの欠如が示されている。彼女は物質的には何不自由なく贅沢な生活を送った家を「家と呼ばれる荒れ狂う住処」(the turbulent element called home)と回想し (29)、無批判に「家」と認めることを拒んでいる。リリーは幼いころからすでに、「家」と呼びうる精神的拠り所をもたないホームレスであったといえる。

19歳で破産によって家を失い、母も亡くなった後、リリーは父方の叔母で

ある Mrs. Peniston に引き取られるが、リリーは、ペニストン家においての自分を「間借り人」に過ぎない存在と位置づける (148)。その家は、「醜悪な黒クルミ材」で内装が施され、「不自然なほどしみ一つなく片付けられ、霊廟のように陰鬱」であり、応接間は「生き埋めにされるかのような息苦しい」場所である (99-100)。ミセス・ペニストンの家もまた、よりどころたる「家」ではあり得ない。家を渴望するがゆえに、彼女は上流階級の邸宅から邸宅への逗留生活を続け、「家」と感じられない家からできるだけ逃れようとするのである。それは、後に、下宿屋で過ごす時間を嫌い、街で時間を過ごすことにより反復される (301)。

リリーの家の破産と夫の死後、母は、リリーの美しさを自身に残された唯一の資産ととらえ、それを手段に娘を金持ちと結婚させ、以前の贅沢な生活を取り戻そうと目論むがその志を果たせぬまま失意のうちに他界する。美を経済的価値と見なし、結婚を美と金の交換と考える母と違い、リリーは、自身の美を「善に導く力」と考え、「ただ単に金持ちであるだけの男」との結婚を望まない (35)。彼女のこのロマンティックな結婚観は、母の主張する美と金の交換としての結婚に対するアンチテーゼとして構築されたものといえるであろう。彼女は、結婚に母以上の条件を課すことによって、母の目指すところの結婚を退けようとしている。

しかし、彼女の経済的状況は金持ちとの結婚を緊急課題とする。リリーは裕福さと家系において申し分のない Percy Gryce との結婚を目指す。Bellomont の Trenor 邸でのハウスパーティに向かう列車の中で彼とひと時を過ごし、グライスを魅了する。しかしその時すでに、リリーは彼が退屈な男にすぎないことを見抜き、「ブラウNSTON<sup>3</sup>の外装と黒クルミ材の内装のぞっとするような彼のマディソン街の邸宅と霊廟のような別館」を思い浮かべる (22)。グライスからの求婚がなされるはずであった大事な局面で、彼女は Lawrence Selden と時間を過ごし、婚約を逃す。Carry Fisher が、これまでのリリーの結婚に向けての活動について「奴隷みたいに一生懸命土地を耕して、種蒔きして、しかし肝心の刈り入れの日に、寝過ごすか、ピクニックに出かけてしまう」と語ることから (189)、リリーはこれまでも同じように幾度か結婚の機会を逃していることが推察される。そしてキャリーは「それはただの気まぐれではなく、心の底では自分が得ようと努めているものを軽蔑しているからではないか？」と、洞察力ある見解を示している (189)。

Dale M. Bauer が「グライスと教会に行く代りにセルデンと話すというよう

な、リリーの破滅的な衝動は、実は母のファンタジーに対する謀反である」と指摘する通り (105)、結婚の回避の反復は、決して気まぐれではなく、母の描く結婚の図式に対する拒絶であり、母に対する謀反である。その背景には、彼女に「家」への帰属意識を持たせることのできなかった母に対する反感がある。その母が望む形の結婚において得られる「家」に対して彼女は懐疑的にならざるを得ない。また、リリーの「家」に対する敏感さは、結婚によって獲得されるべきグライスの家の、ミセス・ペニストンの家と同種の陰鬱さを見逃さない。「家」を渴望するリリーは、疑わしい「家」を拒絶するのである。

リリーの母は社交界の流れに乗り遅れまいと、必死でその生活を送っていた。その中で、母は、銀行通帳が示す以上の金持ちであるかのような生活を演出する素晴らしい管理者であったが (30)、破産によってその管理能力は無意味なものとなる。Elizabeth Ammons は、「リリーの結婚の拒否は女性が無力な関係性に対する嫌悪にある」と述べている (35)。リリーの母はもとより、Judy Trenor にしろ、Bertha Dorset にしろ、いくら夫を支配し、家を指揮しているように見えようとも、彼らの財力無しには無力な存在でしかないのである。リリーが母について「薄汚いこと (to be dingy) が彼女の運命であった」と結論づける時 (35)、それは母の無力さに対するものであったのではないだろうか。

### 3 天職の模索

「とても貧しく、しかしとてもお金のかかる」女性であると自覚するリリーは (10)、その贅沢な生活の維持を「一人でやっていけないのなら、共同経営しなければならない」とセルデンに語る (12)。彼女がもったいぶって言うところの共同経営とは、つまりは金持ちの男性との結婚である。しかし一方、リリーにとって「結婚はしなければならない最も嫌なことの一つ」でもある。「結婚はあなたの天職 (vocation) ではないのか？」というセルデンの問いかけに対する「ほかに何があるのか？」というリリーの答えは (9)、女性の天職は唯一結婚である、という社会規範の確認であるとともに、結婚以外の天職の可能性へのはかない問いかけともとらえられる。

浪費癖や賭け事の支払いの必要のために経済的困窮の状況にあり、金持ちとの結婚もままならないリリーは、その焦燥感のなか、自立の道を考える。その際、彼女は、「自分が眼識 (tastes) と勿体をつけて呼ぶところのとりとめのない関心事は、何一つ、甘んじて人知れず暮らすにも足るものではない」と卑下

するものの、自身の持つ眼識を自立と結びつけている (39)。セルデンがリリーの資質を「美と選り好み」(beauty and fastidiousness)と要約するように (5)、美と眼識は彼女の存在を引き立てる強みであり、彼女もそれを自負している。眼識はとりとめのない関心事ではなく、上流階級の構成員にとっては持つべき重要な資質である。Thorstein Veblen は *The Theory of the Leisure Class* において、「顕示的閑暇は、立ち居振る舞いの入念な修練や、どのような消費財が上品であり、それを消費する上品な方法とはどんなものかに関する鑑賞力と識別力の養成へと向かう」とし (50)、有閑階級は、眼識を養い目利きとなることが求められる、と述べている (74)。

リリーが自負するように眼識が他を凌ぐとしても、それは階層内においては比較の範疇でしかない。しかし、それに欠ける新興成金にとっては、眼識を持つ者からの助言は、短時間で社交界の地位を固めるうえで金銭的に換算しうる価値であるといえよう。キャリアはまさに、この眼識によって生計を立てている。リリーもまた、Brys、Gomers、そして Mrs. Hatch に対して彼女の眼識を何らかの見返りと交換に差し出しているのである。この意味において眼識は、自立の手段となり得るものである。しかし、眼識による助言を仕事と割り切るキャリアと違い、リリーはその眼識を自分のために使うことを目指している。

眼識は、*The Oxford English Dictionary* によれば、「何が適切で、調和がとれたもので、美しいものであるかについての感覚、特に自然や芸術の美についての識別力」という意味を持ち、リリーが自負する「芸術的感受性」と同義であろう (110)。ヴェブレンは眼識を目利きとしてとらえているが (74)、リリーのそれは目利きであることでは飽き足らないように思われる。リリーは、自身の美と共に、芸術的感受性を優越感のよりどころとし (110)、その発露の機会を折に触れて求めている。ミセス・ペニストンの応接間の改装に対する頻繁な意欲の表明はその表れであろう (8, 107)。以前の結婚候補者との結婚話の頓挫の原因も、リリーによる家伝来の宝石の台のはめ直しと応接間の改装に対する相手の母親の危惧が原因であることが、リリー自身によって語られる (10)。室内装飾の本を出版したウォートンが、その実践としてザ・マウントを建てたように、リリーも芸術的感性の実践を強く望むのである。しかし、彼女の境遇において、その欲求が満たされることはない。

このような欲求不満の状況の中、新興成金であるブライ夫妻が、一気に社交界の一員として認められようと、向う見ずにも上流階級の婦人達を演者とする「活人画」(*tableaux vivants*)を企画する (131)。この催しは、リリーがその芸

術的感受性を発揮し、創作意欲を実践する格好の機会となる。

Lily was in her element on such occasions. Under Morpeth's guidance her vivid plastic sense, hitherto nurtured on no higher food than dress-making and upholstery, found eager expression in the disposal of draperies, the study of attitudes, the shifting of lights and shadows. Her dramatic instinct was roused by the choice of subjects, and the gorgeous reproductions of historic dress stirred an imagination which only visual impressions could reach. But keenest of all was the exhilaration of displaying her own beauty under a new aspect: of showing that her loveliness was no more fixed quality, but an element shaping all emotions to fresh forms of grace. (131)

活人画において、リリーは「水を得た魚のように本領を発揮する」。彼女の創作意欲はその表出の場を得たのである。画家 Paul Morpeth の指導の下とはいえ、リリーは、活人画製作の様々な場面——垂れ布の配置、ポーズの研究、光線の転換、画材選び等——に関わっている。「ポーズ」(attitudes)、「題材」(subjects)、「再現」(reproductions)などの複数形は、彼女が自身の活人画だけでなく、他の活人画の製作にも様々に関与し、創造性を発揮したことを意味するであろう。しかし、リリーが最も熱を入れたのは、自分自身の活人画であった。彼女はその創造性を自身の活人画において思う存分発揮したのである。

リリーの活人画は観客を驚嘆させることに成功する。しかし、それは彼女の創造性に対するものではでなかった。「それはレイノルズのみセス・ロイドの画風に対する賛辞ではなく、リリー・パートの生き生きした生身の美しさに対するものであった」(134)。観客の中で、彼女の活人画の演出の能力に目を向ける者は一人としていないのである。Ned Van Alstyne の反応は、「老練な目利き」らしく (135)、衣装やリリーの意図に言及するものの、「今夜までリリーの体の線がどんなものか知らなかった」という言葉は (138)、その感嘆の対象がリリーの身体そのものにあることを暴露する。

リリーの活人画に対する、セルデンの、彼女の身体を通して表現される抽象的な美への賛辞は (134)、彼女の狙い通りのものであろう。彼女の思惑はセルデンにおいては完全ともいえる成功をおさめている。彼女は観客をセルデンに設定して自身の活人画を演出したともいえるであろう。しかし「初めて、本当のリリー・パートを見たような気がした」というセルデンの高揚感 (135)、

演出されたリリーを本当のリリーであるとする誤解に基づいている。「彼女の最も単純な行為さえ、深慮遠謀の結果である」と考えるセルデンが (3)、彼女の演出による活人画のリリーを、本当のリリーと思い込むのは皮肉であり、彼の洞察力の欠如を物語っているともいえよう。

リリーの従兄弟である Jack Stepney は「まるで競売物件のように立っていた娘」と活人画のリリーを酷評する (157)。彼の批評は、活人画での演技であることを無視して、リリー自身の道徳的退廃への非難にその矛先を広げている。自身の美を最大限に表現しようとするリリーの創造性の本能は、自身の社会的立場への考慮を凌駕しており、パウアーが「リリーが自分自身を創始しようとする衝動 (Lily's impulse to author herself) は未婚の女性にとっての妥当な役割の読み違えを露わにする」(97) と指摘するように、危険をはらむものである。リリーの創造性の実践の成功は、女性を動産とみなし、それを手に入れたという男性の欲望を過度に刺激するという好ましからざる結果をもたらす。

活人画でのリリーについて、パウアーが「彼女はあくまでリリー・バートであり続けた。モデルや演技者としてではなく、彼女は自分自身を芸術作品として作り上げ、それによって作者性を獲得した」と述べるように (97)、モデルの自分より製作者である自分を優先させたりリーは、確かに活人画において作者であった。そしてその自意識ゆえにリリーは、後に、活人画を取りまとめたモルペスからの、絵のモデルになってほしいという所望を拒絶するのである (251)。しかし、活人画におけるリリーの問題点は、彼女が作者でありながら同時にモデルであることにあるのではないだろうか。観客の無理解さは、リリーの作者性を葬り、身体を曝す女性の地位に彼女を貶める。リリーは、自身の芸術的感性の可能性を、活人画において試した。彼女の創造性の実践は、不毛に終わるとはいえ、天職という「家」の獲得の模索であったといえるであろう。ウォートンが、自身の創作活動に対する周囲の無理解に失望の念を感じたように、リリーもまたその辛酸をなめるのである。

#### 4 「家」の発見

タキシードにあるキャリー・フィッシャーの小さな家は、リリーに「家」についての新たな視野を提供する。それは多忙なキャリーが秋の数週間の間だけ、娘と静かな時を過ごす場所であり、そこにリリーは「平穏と親しみ」と共に「休息と安定」を見出す (249)。それは上流社会への道案内人としてキャリーが平



素過ぐす新興成金のブライ家やゴーマー家の環境においては感じられることのないものであった。

「自分に合った環境」というリリーの共感（249）、第一にキャリーの家の家具の配置や、物静かで有能な使用人を通してもたらされている。それはベロモントのトレナー邸の寝室のしつらえに感じた優れた気品に対する親近感と同様に（40）、洗練された趣味の共有感覚である。リリーは、離婚歴のあるキャリーが社交界において「きわどい記事」（spicy paragraph）を体現しているようないわくつきの女性であろうとも（55）、彼女の人格の基盤は上流社会によって継承されてきた「社会的信条」（social creed）にあることを改めて認識する（249）。伝統により培われ洗練された趣味の彼女の家は、もはや社交界のメインストリームから外れ、新興成金の世界へ、そしてそのまた周縁へと下降移動中のリリーに、懐かしい空間として安らぎをもたらす場であった。

キャリーの小さな家は、その趣味の良さばかりではなく、ヴェブレンの顕示的消費の典型としての「家」との味の違いを体現している。ヴェブレンが、「富が蓄積されると、顕示的消費が友人や競争相手の助力を得て、贈り物や宴会を提供するという手段においてもなされ、それによって競争相手は招待主の社交儀礼の力量をしっかりと見せつけられる」と述べるように（75）、有閑階級においては、家はそれ自体の壮麗さはもちろんのこと、そこにおけるもてなし——宴会の供与——が重要な富の明示の機会となる。招き、招かれることの繰り返しの上流階級の社交生活において、家は私的空間としてよりも、公的空間としての役割を大きく担うこととなる。そこでのもてなしの成否は社交界における評判、名声そして地位に影響を及ぼすのである。

『歓楽の家』における、ベロモントのトレナー邸での、他を凌ぐことに専心したハウスパーティ、ブライ家の新しい豪邸での、社交界での足場確保のための盛大な催しである活人画、そしてトレナー家がブライ家に対抗して計画するニューヨークの家の舞踏室の増築計画は、宴会の供与による富の明示の好例であろう。さりげなさを装う形であれ、あからさまな野望としてであれ、富の見せつけあいの場としての家は、私的な場としての意味を失い、社交界の競争原理を実践する公的な空間として機能する。このような家とは対照的な、家族と過ごすための私的空間としてのキャリーの「家」は、「自分の力でかち得た休息」であると彼女自身によって語られるように（250）、競争の場ではない、休息の場としての「家」の在り様を指し示している。キャリーの家に対するリリーの共感、社交界の公的空間としての家に対する懐疑、批判を映し出していると



いえよう。

さらに、キャリアの家に対する共感、その家が娘との時間を過ごすための場所だということからも生じているであろう。リリーは「もし時間と金が充分手に入れば、彼女はその両方を娘に捧げてしまうのではなからうか」と考えるほどに、キャリアの、娘に対するいとおしみの強さを実感する (250)。Dolores Hayden は *Redesigning the American Dream* において、アメリカン・ドリームを「社会的地位の上昇志向と住宅所有」と定義づけ、アメリカの住宅の在り方について考察している。その中で彼女は、「家庭 (home) は物理的空間を指すと同時に、家庭でおこなわれるナーチャリングを指してもいる」と述べている (81)。ナーチャリングは「いつくしむ」という精神性と「世話をする」という行動を要する。ハイデンは、ナーチャリングが家事労働と不可分に絡み合うため、ジェンダーによる公私の領域の住み分けというイデオロギーに組み込まれてきた歴史がある、と指摘する (59, 82)。19 世紀にはじまる家政学の始祖とされる、Catharine Beecher はもとより、第二次世界大戦後のアメリカのプロパガンダもまた、男性は生活費を稼ぎ、女性はナーチャリングのために家庭に在るべきである、と訴えたのである。<sup>4</sup>

ウォートンが、このようなイデオロギーが支配的であった時代において、シングルマザーの家庭におけるナーチャリングを描いていることは興味深い。キャリアは二度の離婚歴があり、社交界において上流社会出身であることを生かし収入を得ている。自活するシングルマザーである彼女は、家長と母の役割を一手に担う、世紀転換期においては希少な存在である。その仕事は一年の大半を新興成金の家での逗留に費やすことを強いるものであるが、彼女が年のわずかな数週間の娘との時間をどれほど大切にしているかをリリーは目撃するのである。使用人を持つことのできる階層であるキャリアは、ナーチャリングを乳母や家庭教師に任せることが可能であり、実際年の大半は小さな娘を彼らに託さざるを得ない生活を送ってはいるものの、ナーチャリングは彼女にとって放棄することのできない重要な生活の一部であり、タキシードの気持ちのいい小さな家は、まさにそのための「家」なのである。

母の子に対するナーチャリングへの視線は、共働きの母親 Nettie Struther との出会いによって引き継がれる。彼女は Gerty Farish の慈善活動の場であった女子クラブのメンバーで、かつてリリーの経済的援助によって病気を克服していた。失恋の痛手を乗り越え、幼馴染みと結婚しているネッティの家で、リリーは、仕事帰りの彼女が、幸せそうに生後四カ月の娘の食事の世話をする姿

を目の当たりにする。リリーは「満ち足りて、この上なく幸せそう」な赤ん坊をその胸に抱く (315)。リリーが赤ん坊に見る「その胸が安全であることに対する信頼感」は、ナーチャリングによる満足感によりもたらされている (315-6)。人間は誕生後すぐに独力で生存できず、ナーチャリングを不可欠とする生き物である。それは人間が経験する最初の他との関係性の構築である。リリーはそこに依存ではなく、「信頼」をみている。それはリリー自身が母子関係に求めていたものではなかっただろう。

同時に、リリーは赤ん坊を抱きながら「まるで子供が彼女の中に入り込んで、彼女の身体の一部になった」ように感じる (316)。リリーの人生における身体接触の経験は、この時が最も密接な瞬間だったのではないだろうか。子供が「体の中に入り込む」ようであり「身体の一部になった」ようであるという表現は、官能的イメージを喚起する。

Elaine Showalter はこの場面を解釈し、「赤ん坊を抱きながら彼女も抱かれ、肉体的な緊密な結びつきへの彼女自身の渴望を表している」と述べている (144)。子供を抱く際、リリーは自ら手を差し伸べ、ネッティから赤ん坊を受け取る (315)。それは肉体的接触を求める彼女の意思表示であり、それは母と子の親密性の欲求である。リリーは子供を抱くことを通して、自身の母との関係における親密性の欠落を補完しようとしている。さらにショーウォルターは、ウォートンが「母の庭という子供時代の選択肢——官能的で暖かく開かれた空間——をもたなかった」と述べている (146)。親密性の欲求はリリーに投影したウォートン自身のものでもあろう。

The poor little working-girl who had found strength to gather up the fragments of her life, and build herself a shelter with them, seemed to Lily to have reached the central truth of existence. It was a meagre enough life, on the grim edge of poverty, with scant margin for possibilities of sickness or mischance, but it had the frail audacious permanence of a bird's nest built on the edge of a cliff – a mere wisp of leaves and straw, yet so put together that the lives entrusted to it may hang safely over the abyss.

Yes – but it had taken two to build the nest; the man's faith as well as the woman's courage. Lily remembered Nettie's words: *I knew he knew about me.* (319-20)

ネッティとの出会いにおいて、リリーは「家」についてのさらなる認識を得る。それは「巣」という概念である。そこにリリーは「存在の中心的真実」を見るのである。そして、この巣という避難所を「ネッティが自ら作った」と捉えている。「家」は与えられるものではなく、自分で作り上げるもので、そこには「男性の信頼と女性の勇気」が必要である。リリーは「彼が私のことについてよく知っているのをわかっていた」というネッティの言葉を思い出し、「家」における信頼関係の構築の重要性を悟るのである。リリーはネッティの小さな家で、「家」の真髄を垣間見たといえよう。

ネッティの赤ん坊との肉体的接触は、リリーの死の間際の幻想に引き継がれる。彼女は睡眠薬による夢うつつの意識のなか、「孤独感が消えた」ことに気づく。それは「ネッティ・ストラザーの子供が自分の腕の中で寝ていて、肩にその小さな頭の重みを感じた」からである。そして「温かさと喜びの優しく突き抜ける戦慄」を感じるのである(323)。赤ん坊を抱くリリーについては、様々な解釈が分かれるところである。Cynthia Griffin Wolff は、赤ん坊との一体感を「小児化する力の証しである」と述べ(130)、Patricia Meyer Spacks は、「想像上の幼児を抱くという、現実逃避的母性幻想である」と、退行説を主張する(241)。一方、Judith Fryer は「官能的な自己と他の容認である」と述べ(94)、ショーウォルターは「愛に満ちた連帯と共同体の意識にリリーが目覚めたことを表している」と(145)、肯定的に解釈している。

リリーが、母と子のナーチャリングに、依存ではなく「信頼」を見出し、自ら赤ん坊に手を差し伸べ抱くことで、「暖かさと命を取り戻す」という意識を得ることは(316)、退行ではなく、再生としてとらえることができるであろう。そして、死の間際、リリーが「もっと楽な姿勢になり、丸い産毛の生えた頭をのせるために腕をへこませ、そして、どんな音でも眠っている子供の妨げにならないように、と息を殺し」(323)、まるで巣を作るように、腕で窪みを作り、赤ん坊をその中に抱くのは、「家」を作り上げようとするリリーの意志ともとらえられるであろう。ネッティの家で初めて子どもを抱いたとき、彼女が人生に求めていたものがあらわになった。セルデンに伝えるべき言葉を考え、孤独と恐怖に襲われつつ、赤ん坊との肉体的接触という、なかば創造的、なかば傷を帯びた親密性の記憶が彼女を圧倒的に支配したのである。

## 5 終わりに

1890年代から1920年代にかけては、近代的アメリカが成熟した時代であり、女性の集団的な力が政治改革や婦人参政権運動を推し進めた時期とされる(エヴァンズ 235)。また、この時期は「家庭生活をめぐって、おびたしい量の政治論争がくりひろげられた時期でもあった」(ハイデン 85)。アモンズは、「ウォートンは女性運動(the Woman's Movement)に深く影響を受けていたが、その熱狂的状况の中、それに異議を唱えるように世間の一般の楽観主義と現実の乖離を吟味していた」と述べている(2-3)。そのような社会風潮の中で書かれたこの作品には、上流階級の贅沢な生活を描く中、様々な女性像、様々な家が示され、ガーティの女子クラブにおける慈善活動、キャリアが一時夢中になる社会改革運動、そして移民の労働力等に、世紀転換期の動向が織り込まれている。

『欲楽の家』は、「家」を希求しながらも、精神的よりどころとなる「家」を持たずに育ったリリーが、物理的な家さえ次々と失いながら、ついには「家」の本質についての認識を得る物語といえよう。そこには、ウォートン自身の「家」に対する深い関心が表れている。そしてそれはその時期の社会的な関心事でもあったのである。リリーの「家」の探求において、ウォートンが、シングルマザーの家、共働きの母親の家で、家の真髄を見出させていることは一考に値するであろう。当時の、家庭についてのイデオロギーは、専業主婦の家庭をひな形として形成されており、シングルマザーや共働きの家庭は変則的な形態であるとして、蔑まれたり、危険視されたりしていたのである。一世紀以上前に、保守的な傾向を持つウォートンが、このような家庭に注目したのは、彼女の時代を感知する能力の高さゆえであり、同時に彼女自身が抱える「家」についての私的な問題意識が、社会的真理を貫いていたがゆえであるといえるであろう。リリーが見出した「家」はナーチャリングの場である「家」であった。リリーが「家」に求めたのはこの親密性であった。それは、ウォートン自身が求めるものでもあった。彼女は家庭の形式にこだわったのではないが、広い家に使用人を抱える上流階級の家においては、この親と子の親密な関わりが希薄となる傾向があることを彼女は自身の経験を通して感じていたであろう。リリーが「家」を見出しつつ死で終わる結末は、ウォートン自身が「家」の探求の道半ばであったことを暗示しているのではないだろうか。彼女は、ザ・マウントを持ち、作家と言う天職を得た。しかし、親密な関係性を育む「家」は彼女にとって未だ探

求すべき課題であったのである。

## 註

- <sup>1</sup> オランダ植民地時代のオランダからの移民の子孫 old Dutch families と独立戦争において英国と戦ったイギリスからの移民の子孫 Yankees を祖先に持つ、19 世紀中頃まで隆盛であった上流階級を指す。20 世紀初頭には new New York に吸収され、消滅したとされる (viii-ix)。
- <sup>2</sup> 以降、和訳は基本筆者の拙訳であるが、適宜佐々木みよ子他訳『歓楽の家』を参照させていただいた。
- <sup>3</sup> ニューヨークの富裕層の主な居住形態であった、大きめのロウハウス (row house) に与えられた名称。一般にその前面が地元で豊富に取れた、褐色砂岩で覆われていたことに由来する (プランツ 90-91)。ウォートン自身、このブラウストーンが嫌いであったことが『振り返りて』において述べられている (55)。
- <sup>4</sup> ナーチャリングのジェンダー分業は、20 世紀後半、女性が家事労働における男性の参加を求めることにより、打破の機運を見ることとなる (ハイデン 101-102)。

## 引用文献

- Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America*. U of Georgia P, 1980.
- Bauer, Dale M. *Feminist Dialogics: A Theory of Failed Community*. SUNY, 1988.
- Fryer, Judith. *Felicitous Space: The Imaginative Structures of Edith Wharton and Willa Cather*. U of North Carolina P, 1986.
- Hayden, Dolores. *Redesigning the American Dream: The Future of Housing, Work, and Family Life*. Rev. and Expanded ed. Norton, 2002.
- Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: A Biography*. Fromm International Publishing, 1985.
- Showalter, Elaine. "The Death of the Lady (Novelist): Wharton's *House of Mirth*." *Representations*, vol. 9, 1998, pp. 133-149. JSTOR, 3 Sept. 2015.
- Spacks, Patricia Meyer. *The Female Imagination*. Alfred A. Knopf, 1975.
- Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolu-*

*tion of Institutions*. Macmillan, 1899.

Wharton, Edith. *A Backward Glance*. 1934. *The Complete Works of Edith Wharton*.

Edited by Yoshie Itabashi and Miyoko Sasaki, vol. 23, Rinsen Books, 1988.

—, *The House of Mirth*. Introduction by Cynthia Griffin Wolff, Penguin, 1985.

Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. Oxford UP, 1977.

ヴェブレン, ソースティン『有閑階級の理論』高哲男訳, 筑摩書房, 1998 年.

ウォートン, イーディス『歓楽の家』佐々木みよ子他訳, 荒地出版社, 1995 年.

エヴァンズ, サラ・M『アメリカの女性の歴史: 自由のために生まれて』第二版 小檜山ルイ他訳, 明石書店, 2005 年.

ハイデン, ドロレス『アメリカン・ドリームの再構築: 住宅, 仕事, 家庭生活の未来』野口美智子他訳, 勁草書房, 1991 年.

ブランツ, リチャード『ニューヨーク都市居住の社会史』酒井詠子訳, 鹿島出版会, 2005 年.

## The Quest for a Real Home Lily Bart's longing in *The House of Mirth*

---

Michiko Imai

---

This paper examines the life of Lily Bart, the belle of society, viewing her life as a journey to finding her “home”. In *The House of Mirth*, Edith Wharton divests Lily of her home in various ways. She is homeless, not only as an orphan and a boarding-house resident, but also she is psychologically homeless. Though Lily's turbulent life is totally different from that of the author, they do share something in common in that both are keenly interested in what it means to have a home and they both describe a sense of homelessness.

Edith Wharton was born as a member of an “old New York” family in New York. She had a deep interest in the home. She even published a book about interior design, *The Decoration of Houses*, and she put her concept of home in practice at “The Mount,” a house which she built in Lenox, Massachusetts in 1902. She reminisces about The Mount in *A Backward Glance*: “The Mount was my first real home” (125), though it was a home she did not have until she had reached her forties. Also, Wharton claims that she “felt like some homeless waif . . . [who had] finally acquired a nationality,” and it was at this point that she developed a firm belief that “story-telling was my vocation” (*A Backward Glance* 119). She wrote *The House of Mirth* during the period when she acquired “her first real home,” found



her vocation in writing, and felt as if she could actually escape from her homelessness. Her sense of homelessness is reflected in the character and experiences of Lily Bart.

Lily has no sense of belonging to the house where she was born and blames her mother for it. Her failure in marriage is caused by her inner hatred of her mother, who could not create a “real home” for Lily. She has a feeling of distrust in marrying into a fortune because her mother urges her towards such a decision. A home which would be acquired, as her mother wished, could not be her “real home”. Lily’s longing for a real home rejects such a doubtful arrangement.

The *tableaux vivant* of the novel describes her attempts to discover a vocation that does not involve marriage, which is prescribed to her as the most obvious female vocation. She explores the possibilities of finding another way to create an independent life for herself by exercising her artistic sensibility. In doing so she actually displays her creativity, but the audience interprets her performance as a display of her body instead. In the end, her attempts to escape from homelessness and obtain her own independent vocation result in failure.

Disinheritance causes the degradation of Lily. She has less and less to do with society circles. However, in the process of her descent, the novel shows various houses to Lily, such as Carry Fisher’s little house and Nettie Struther’s cozy flat. And Lily grasps the meaning of “home” from their nurturing. When Lily holds Nettie’s baby in her arms she feels as if the child entered into her and became a part of herself. This sensual feeling dominates her in the hour of death. She softly holds the baby, as if she were making a nest for herself. This intimate human relationship must be what Lily and the author are both craving for.